

自分で買うことはないが、たまに老舗の菓子を戴くと、店の低姿勢な自慢話もじっくり読む。マタイ福音書の冒頭、イエス・キリストの系図(1:1~17)は晦渋で、老舗の履歴のような面白みはない。

そもそも「マリアの胎の子は聖霊によって宿った(1:20)」のであって、養父ヨセフの系図(1:16)が、キリストとどう関係あるのか。新約聖書は書き出しの「つかみ」で失敗しているのではなからうか。

聖書を読もうと決意し新約冒頭の長大な系図で挫折した、という声を幾人かから聞いた。うん、分るよ。それでは、どんな姿勢で聖書を読めばいいのか。

一つの読み方としては、埋蔵された宝を掘り当てる能動性ではなく、聖書が自ずと語りかけて来る何かを柔らかく聞く受動性。そのために可能な限り自由でいること。つまり「私」の枠となっている思考癖や先入観、倫理観や感情から自覚的に離れていること。

脱力して御言葉を迎えると、どうでもいいような系図から聞こえて来る福音がある。

祝福の源である父祖アブラハム(創世 12:2)、神の主権を現す統一王朝を開いたダビデ(サムエル下)。こうした偉大な人の流れがイエスの系図(マタイ 1:1)。父の系統として記される系図だが、よく見るとどういいうわけか母が五人記されている。

タマル(1:3)、ラハブ(1:5)、ルツ(1:5)、ウリヤの妻(1:6)、そして母マリアだ(1:16)。マリア以外は異邦人で、父の系に女の苦しみ「染み」となっている感がある。

タマルは男たちに翻弄され(創世 38:6~30)、ラハブは遊女(申命記 2:1~21)、ルツは貧しい寡婦(ルツ記)、ウリヤの妻バト・シェバはダビデの横恋慕から夫が戦士させられ(サムエル下 11:2~17)、マリアの苦しみは待降節の記述にある通り。

異邦人として蔑視され、権力や策謀に翻弄され、貧しさと誹謗中傷に痛めつけられた五人の母。アブラハム=ダビデの輝かしい系図に、あたかも染みのように彼女らの名が記されている。

この系図を風景に置き換えると、母たちは秋の森にひときわ赤いウルシの低木のよう。

思考癖や先入観を手放し、力を抜いて柔らかく、イエスの系図である秋の森を見てみよう。

あっ、そうなのか。イエスが引き継いだのは、民族や王国の栄光というより、彼女らの歴史ではないのか。

神は歴史のあらゆる場面で民と共におられたが、とりわけ神の御子は、貧しい者、痛む者、憤る者、虐げられる者、忘れ去られた者を、御自分に引き受けてお生まれになった。

新約第一書の福音書は、冒頭で、系図の底にある真実を「染み」として滲ませている。紅葉したウルシのように、色鮮やかに。

系図の始まり父祖アブラハムは神に忠実で高潔な一方、恐妻家で優柔不断(創世 16:5)。妻サライの剣幕に気おされて「あなたの奴隷はあなたのものだ。好きなようにするがいい(16:6)」とハガルを放り出す。これは残酷な不正義だった(21:14~16)。

虐げられたハガルも傲慢で(16:4)、虐げたサライも神を軽んじた(18:15)。こうして全体を眺めてみると、女も、男も、誰もがことごとく神に背いている。

キリストは、女たちの痛みや悲しみを引き受けてお生れになった。ゆえに私たちの弱さや不安も一身に負って下さっている。だがそこに留まらない。弱者も強者も、敗者も勝者も、己が罪に囚われて神に従えない。この罪は、もう根本から負ってもらうより他ない。十字架で御子の命と引き換えに。



《おまけのひとつ》

キリスト系図の表通りは勝利と栄光 母たちの物語は路地裏にひっそり 知らない町へ降り立つとま
ずは路地裏逍遥 すべての母は違っていたが 表通りの勝利と栄光は どの町でも同じであった